

テロ被災遺児を支援

ポスターとポストカード制作

活動に協力の輪

エニース 川崎社長 収益金を赤十字社へ

米中核回帰時多額テロから二年。各地で追悼行事が行われるなか、女性社長を中心とした支援活動に、協力の輪が広がっている。

この女性社長は、別が生まれてしまったはず。母の立場から少しでも役立つ」と被災児童の支援活動を行い、立派なポストカードとポスターを制作した。



「テロ事件で生じた母子家庭と遺児たちに少しでも役立つ」と、ポスターを手にする川崎エニースさん

事件後、ポスターはワイルドレッドセンターに送られたほか、川崎さんの知人や友人たちを通じて、日本やニューヨークの学校、遺族に届けられた。彼はアメリカでも反響を呼び、川崎さんの元には「測地の小学生が描いたテロの絵も送られてきた」という。ポストカードの収益金は、米国の赤十字社に寄付した。今年に入ってから「テロの記憶が薄れないように」と、各種団体の協力を呼び、各地の追悼イベントや、ポストカードなどを無料配布している。

テロ発生時、川崎さんの長女「ちとせ」はテロ現場のワイルドレッドセンター近くで生傷。二人とも無事だったが、「一目見れば昔傷不慮を染み替わさず、気が気でない状態だった」という。「ハイスクールに通学している娘の友人の母親が、テロの犠牲者になった人がいて、推入などではなかった。最近な家族の犠牲もあったが、川崎さん自身、妻と娘、子どもを養育してきた、シングルマザーとしての経験から、残された妻の問題（母子家庭）にも傾心ではいらなかった。

「ハイスクールに通学している娘の友人の母親が、テロの犠牲者になった人がいて、推入などではなかった。最近な家族の犠牲もあったが、川崎さん自身、妻と娘、子どもを養育してきた、シングルマザーとしての経験から、残された妻の問題（母子家庭）にも傾心ではいらなかった。」

「シングルマザー」とい、シングルマザーを支援することは、困難を感じる言葉が一般に認知されているNPO設立を目指したものの、女性が「し、現在申請中。今年切」と、常にピンチを家の大黒柱として生きてきたこの困難さを今の社会が深く理解しているとは言いがたい。主眼だった女性が備える職種は限られ、安心して子どもを預けられる託児所もわずか。問題は山積している。しか、度中に設立のメドが付く、そんな現実を打破したいという。



「悩むこと考える」

「あまのこ」川崎さんは、

「悩むこと考える」

(下川有紀乃記者)